

「耳鳴り手記」 山田 忠久 57 歳

2011 年 12 月 9 日

(この方は頭が良く正義感が強く、真面目で若いときから野心の実現の為にオーバーワークをやってこられました。色々ストレスもあったようですが、耳鳴りが生じる前にやっと生活の安定が訪れたのです。連続したストレスの多い生活の中で、それまでストレスホルモンであるステロイドホルモンを大量に出してストレスに耐えてこられたのですが、最近やっとストレスから開放されてステロイドホルモンを自分で作る必要がなくなったときにご自分の免疫が回復しだしたのです。長年にわたって免疫抑制している間に神経に増殖してきたヘルペスウイルスを見つけ出し始めたのです。

ヘルペスウイルスは 8 種類の仲間がいます。単純ヘルペス I 型、単純ヘルペス II 型、帯状水痘ヘルペス、EB ウイルス (エプシュタインバーウイルス)、サイトメガロウイルス、突発性発疹を起こす 2 種類のウイルス、最後の 8 つ目は AIDS (エイズ) の患者さんに生じることがあるカポジ肉腫から見つけ出された 8 型のヘルペスウイルスであります。

医学に無知な大衆はヘルペスは 1 種類しかないと考えているようですが、実は 8 種類もあるのです。特に一般大衆に知られているヘルペスウイルスの症状は、老人になってよく見られる帯状ヘルペスといわれる肋間神経が走行している皮膚の上の激しい痛みを伴う水疱であります。これだけしかほとんどの人は知りません。

しかもこの症状も水痘帯状ヘルペスが悪いことをしているとしか理解していません。医者たちはさらに間違った説明をしています。「何か原因が分からないけれども、体内に潜んでいたヘルペスウイルスが活性化して水痘帯状ヘルペスが出た」と嘘をついています。そもそも原因の分からない病気などはこの文明には何もないのです。実は帯状ヘルペスの症状が出るのも患者さんの免疫が正常に戻り、初めて肋間神経に増殖したヘルペスウイルスを見つけ出して殺そうとして症状が出たものであることを全く一般大衆は理解していません。このような大衆の無知がいつまでも続くのは、病気のあらゆる症状は免疫が異物を見出したときに初めて生じる正しい症状であることを現代の医者は誰も大衆に教えないからです。

この方も耳鳴り以外に痺れ感があったり、皮膚がピリピリしたりする症状があり、これらは全てヘルペスと免疫の神経上での戦いの結果生まれる症状なのであります。このような皮膚の症状で来られた患者さんに抗ヘルペス剤を投与するときに、たまたま耳鳴りも消えたという患者さんの訴えを腐るほど見聞きすることにより、耳鳴りもヘルペスウイルス

によるものであることがわかったのです。これが私が常に「患者さんが教科書である」という意味なのです。医学は患者さんの病気があって初めて存在するものであるという原点を世界中の医学者はご存じないのは悲しいことです。

150年前に難聴、耳鳴り、めまい、頭痛などを伴うメニエール氏病がメニエールによって発見されて以来、その原因がヘルペスウイルスと免疫の戦いの為に出た症状であることを、今なお耳鼻科学会に属する専門家の耳鼻科医の全てがご存じないというのもおかしな話です。この患者さんも高槻市内の耳鼻科専門科医の何軒かをはしご医院された後に、専門医でもない私が原因をつきとめ、耳鳴りを治してあげたというのも奇妙奇天烈な話です。専門家医というシステムは患者を呼び込む宣伝にはなりますが、病気を治す実力を示すものではありません。近頃は博士号をとるよりも、専門医になる方が価値があるといわれていますが、病気の原因も見出せないどころか、病気を治せない専門医の存在は意味のないことです。)

それは、突然やってきた。平成22年10月15日「耳鳴り」が始まった。10月18日に近所のI耳鼻咽喉科医院を訪ねた。耳鳴りといっても、強烈に鳴るのは断続的で日常生活にはあまり影響はなく、軽く考えていた。しかし、まわりが静かになる深夜になると、結構うっとうしいもので、医者に行くことにしたのだ。すぐ治ると思っていた。I医院では聴力検査をすると、左耳の低音部に難聴がみられステロイド剤を投与された。

(音は空気の振動によって外耳道から鼓膜に伝えられ、中耳にある人体の中で最小の独立した骨である3つの耳小骨“つち骨”“きぬた骨”“あぶみ骨”によって17倍にまで音のエネルギーが増幅され、内耳へと伝わっていきます。内耳に伝わった音は蝸牛へと伝わります。内耳には蝸牛の他に前庭と三半規管があります。まず蝸牛の説明をする前に前庭と三半規管の仕事について軽く触れておきましょう。前庭は体の平衡や重力を感知し、さらに直線運動の加速も感じ取ることができます。一方、三半規管は回転運動の加速を感知することができます。)

蝸牛はカタツムリの殻に似ているので、蝸牛と名づけられました。この蝸牛は渦巻き型になっているのは言うまでもないのですが、1階が鼓室階、2階が前庭階、中2階が蝸牛管というように3層に分かれています。鼓室階と前庭階には外リンパ液が満たされ、蝸牛管には内リンパ液が満たされており、空気の振動は外リンパ液へと伝えられます。蝸牛管には音の感覚装置であるらせん器があります。らせん器の隙間には“不動毛”と呼ばれる毛を伸ばした有毛細胞があります。外リンパ液の振動で蓋になる蓋膜と不動毛がずれると、有毛細胞はすぐ下に続いている神経線維へと「音が来た」という情報を伝えます。このように私たちが耳にする声、音楽の全ての音は有毛細胞の不動毛に伝えられた情報であります。これだけの説明では蝸牛のイメージが作りにくいでしょうから、さらに詳しく説明し

ましょう。

有毛細胞はカタツムリの中 2 階をらせん状に内側に連なって内有毛細胞が 1 列と、外側に連なって外有毛細胞が 3 列並んでいます。この蝸牛の殻とらせん状をイメージするにはソフトクリームを思い浮かべてください。上から見るとまずカタツムリの殻と同じだという事がお分かりでしょう。内というのはソフトクリームの中心に近い側であります。外というのはカップの淵側であります。さらに 1 階・ 2 階・ 中 2 階をイメージするためには、ソフトクリームの中身の色づけ(味)が 3 層に、ソフトクリームの頂点から底まで色分けされて、しかもそれぞれの層にリンパ液が流し込まれているとイメージしてください。真ん中にある色付けの層が中 2 階であり、その中 2 階に有毛細胞がソフトクリームの頂上からカップの底まで内側の 1 列の内有毛細胞と外側の 3 列の外有毛細胞が合計 4 列が連なっていると考えてください。

さらに蓋膜と不動毛の関係をさらに詳しく述べましょう。もう既に中 2 階のイメージはできたでしょう。この中 2 階の空中に天井が横からぶら下がっていると考えてください。この天井が蓋膜であり、中 2 階の床にけばけばした絨毯が引かれていると考えてください。音の振動がくると、1 階の鼓室階と 2 階の前庭階の外リンパ液に振動が伝えられ、この振動が中 2 階の蝸牛管の内リンパ液に伝えられ蓋膜を揺らすのです。このぶら下がっている天井の蓋膜がゆらめくと内リンパ液もゆらめいて、内リンパ液と接触している絨毯の毛とのずれが生じ、このずれを絨毯の毛が認識することで音の刺激を認識し、この刺激を電気に変えて、有毛細胞の細胞体の下の方から伸びている神経軸索へ伝えて脳に音として認識させるのです。これで大体蝸牛がどのようにして音の振動を電気に変えて脳に伝わっていくかのプロセスの全てがイメージできたでしょう。

それでは次に蝸牛のどこにヘルペスウイルスが隠れているのかを説明しましょう。実は有毛細胞は神経細胞であります。不動毛は有毛細胞の樹状突起であります。樹状突起は元来、物質である情報による刺激を感知するものでありますが、音は形がないものですから振動で音の刺激を捉えているのです。つまり振動によって蓋膜と不動毛とのずれを音の刺激として認識しているのです。このずれを有毛細胞は自分の神経軸索へと伝えて順次脳の神経まで伝えていくのです。従って有毛細胞は“有毛神経細胞”というべきものなのです。まさに有毛細胞は神経細胞ですから、神経細胞が大好きなヘルペスウイルスがこの有毛神経細胞に隠れているのです。

それではこのようなヘルペスは何処から頭蓋内にある内耳神経を形成している有毛(神経)細胞にまで到達したのでしょうか?それは外耳道の皮膚や耳管の粘膜から侵入し、さらにその周辺のリンパ管や血管から有毛細胞に侵入したと考えられます。さらに他の部位の皮膚や粘膜からリンパ管に侵入したヘルペスウイルスが蝸牛管の内リンパ液に潜り込み、

それが有毛神経細胞に侵入することもあるでしょう。ストレスがかかるとストレスホルモンであるステロイドホルモンが大量に作られ、それが蝸牛内の免疫を抑制している間に内耳神経に隠れていたヘルペスウイルスを増殖したのです。ストレスがなくなったり、医者から免疫を抑えるステロイドの影響がなくなったりしたときに免疫が回復し、ヘルペスウイルスを見出し殺そうとして、あちこちの内耳神経に炎症が起こり、耳鳴りや難聴やめまいなどのメニエール氏病の症状や突発性難聴が出るのです。

このようなときに従来の治療はやはり免疫を抑えるステロイド点滴投与であり、ときに改善が見られるのは免疫の戦いがすぐに終わるからです。治らないときは内耳神経の炎症の傷が深いときであります。ヘルペスが増えた原因を治療としてさらに入れ続けるのが現代の間違ったメニエールや突発性難聴やめまいの治療は笑止千万といえるものです。）

この時は、ステロイド剤が功を奏し難聴は即時に解放され、以降現在に至るも、聴力は年相応に正常だ。I 医院の医師は耳鳴りの原因は分からない。と明言するので、僕は見切りをつけ次の医者を探すことにした。高槻中心部の割と大きな薬局で、評判の良い耳鼻科を尋ね Y 耳鼻科に行った。それから、松本医院に、たどり着くまで、2ヶ月かかった。

（どうして難聴が早く治り、耳鳴りは治りにくいのでしょうか？それを世界で初めて私が説明してあげましょう。難聴は音の刺激があるのにもかかわらず聞こえにくいという状況です。一方、耳鳴りは音の刺激がないのにもかかわらず刺激された状態であります。この違いはどのような有毛細胞の障害によって生じるのでしょうか？

難聴は今述べたことでお分かりのように、音の刺激が有毛細胞に完全に伝わっていない状態ですから、有毛細胞の不動毛か蓋膜のどちらかがヘルペスとの戦いによって生じた傷が完全に修復されていない状態だといえます。しかしながら蝸牛の中2階のソフトクリームの頂上からカップの底までには無数に並んでいる不動毛と蓋膜は少しぐらい傷ついても他の不動毛と蓋膜で補えるのですすぐに聞こえるのであります。一方、耳鳴りがいつまでも続くのは、音の刺激がなくても続くのは、まさに傷ついた不動毛と蓋膜が常にずれを起こしているので、常にある種の音が伝わっていると有毛神経細胞が感知していると考えられます。時間の経過の中で完全に不動毛と蓋膜が修復されると耳鳴りもなくなってしまいます。もちろんヘルペスとの戦いが続く限り傷は生じるのですから、そのたびごとに耳鳴りが生ずるのです。

耳鳴りよりも難聴方が重篤である説明の一つをしてあげましょう。難聴は音の刺激があっても、蓋膜と不動毛のずれが生じていないという状態です。従って蓋膜か不動毛のどちらかが大量に欠如しているか、どちらかに修復が難しい器質的な障害が生じていると考えられます。一方、耳鳴りは常に音の刺激がなくてもずれが生じているという事ですから、

不動毛と蓋膜は存在しているのですが、常にずれが生じている状態であり、どちらかに機能的な障害が生じているといえます。従って蓋膜と不動毛の障害が難聴の場合の方が耳鳴りよりもはるかに大きいといえます。器質的な障害を正常に戻すのは正常な有毛細胞を作り直す必要がありますが、機能的な障害を正常に戻すのは有毛細胞の傷を修復するだけで機能が戻るのです。）

Y 医院での 2 ヶ月間では様々な検査をした。まず聴力検査問題なし、腫瘍原因かもしれぬと脅かされ、これはたまたま別の病院で MRI 検査を受けたところだったので、問題なし。最終的には耳下腺の異常ではないかと。耳の下から首にかけてエコー検査を受けたが問題なし。

（私のように患者さんを目撃だけでヘルペスが原因だという事が分かれば、以上の無駄で金のかかる検査は一切必要がない上に、患者さんの時間や検査の負担も一切なくなり、しかも抗ヘルペス薬を投与するだけで皮膚のチクチクヒリヒリ感も同時に治ってしまうのです。このような間違った検査が毎日毎日日本全国の耳鼻科専門病院で行われているわけですから、しかも原因も分からないということになるだけですから、費用対効果は無限大になり、無駄な医療費が天井知らずとなってしまいます。その分耳鼻科医が儲かるわけですから、社会保険システムも誰のために作られたのかが分からなくなります。私のように全ての病気を治すことができる医者にかかれば、3 者両得となり万々歳の世界が生まれます。しかも私は何も耳鼻科の専門医の称号を持っていないのにもかかわらずであります。実際、以上の無駄な検査でかかる費用を全国的に計算すれば目が飛び出すどころか、怒りを超えて呆れて税金や健康保険の掛け金を払うことが嫌になるはずです。）

他にもアレルギー検査をしても、カモガヤからハウスダストいたるまで全然問題なしでした。様々な検査をしましたが後に松本医院で指摘されるヘルペスは検査されることは、ありませんでした。Y 医院で投薬されたのは、イソパイド、コメスゲン、アデコスホーフ、エボントン、レキシソ以上でしたが、症状は一向に改善されませんでした。

（全て無意味な検査であります。耳鼻科医院は大儲けできます。薬代も全て無駄ですが耳鼻科医は薬価差益を儲けると同時に、製薬メーカーが最も潤います。耳鼻科学会を支えている製薬メーカーに儲けさせなければ一円も医学会に金が入らないので、どうしても仕方のないことです。でも皆さん、このような財政赤字が世界一である日本国をまともにするためには、このような無駄なお金は使うべきではないと思いませんか？）

松本医院で受診すると、耳鳴りはヘルペスウイルスが内耳で悪さをしていると指摘された。ここで初めて耳鳴りの原因が明らかにされた。ベルクスロンと漢方のせんじ薬を処方された。原因を明示し治療を施してくれた、松本先生には感謝しています。ありがとうございます

ございました。

(今日はここまで 2011/12/5)